

農林水産省大臣官房長賞

『食えることは生きること』

岡山県岡山市立旭竜小学校 五年 三谷 緑沙

「食えるという文字は、人に良いと書くんだよ。好ききらいしないで、何でも食べれるようになったらいいね。」

去年の夏、なくなつた、おじいちゃんが、ぼくに言ってくれた言葉だ。毎年、夏休み、魚とりをしたり、いっしょにご飯を食べた大好きなおじいちゃん。おじいちゃんのことを思い出したぼくは、好ききらいをして給食を残している自分がかしくなつた。

ぼくの母は、小学校の給食室の先生だ。今年の夏休み『給食ができるまで』を自由研究でまとめようと考えたぼくは、母に給食についてインタビューをした。まず、一番おどろいたのは、この夏、給食室が四十度になることがあったこと。野菜をあらい、虫がないか調べる。食材に問題がないか、すぐ調べられるように、食材は五十グラムとっておく。温度は、二十五度以下、八十度以上が絶対条件。給食を作った後も、大きなかま、お皿、おはしなどをあらい、次の日のじゅんびで、毎日大いそがしだ。お米、お肉、魚、野菜のねだんが上がる中で、ぼくたちの健康を守り栄養を考え、給食のこん立は作られていると母が教えてくれた。

給食って、本当にすごい!! と思った。給食が出てくることは当たり前じゃない。たくさんさんの作り手の人達の努力とがんばりがあつて、給食がある毎日は守られ、ささえられている。全てにおいて、当たり前と思つてはいけけない。どんなことでも『感しや』する気持ちをおすれてはいけけないと思つた。

自由研究のインタビュ中、母に聞かれた言葉を、ぼくは、これから必ず実せんする。

「お茶わんに、ご飯つぶを残さないように食べれてる？」

「スプーン、フォーク、おはしの向きをきちんとそろえて、給食室の先生に返せてる？」

「感しやの気持ちを伝えられている？」

ただ、食べるだけじゃいけない。ぼくは、好ききらいしないだけじゃなく、感しやしながら、給食を食べると心にちかつた。

もし、給食がなくなつたら、みんなこまる。

給食のおかげで、ぼくは、今日まで、学校を一度も休まず、がんばつてこられた。

給食は、みんなの未来をささえてくれている。

食えることは生きること。体が良くなる。

今、生きていることに感しやして、これからも元気に学校をがんばるために、給食をしつかり食べて、毎日を大切に生きたい。ぼくをささえてくれる給食といっしょに、ぼくはこれから、心も体も大きく成長していくんだ。

ぼくは、給食や食べることの大切さについて、考えるきっかけをくれた、おじいちゃん、いつも給食を作ってくれている、給食室の先生、母に、『ありがとう』の感しやの気持ちで、むねがいっぱいになった。